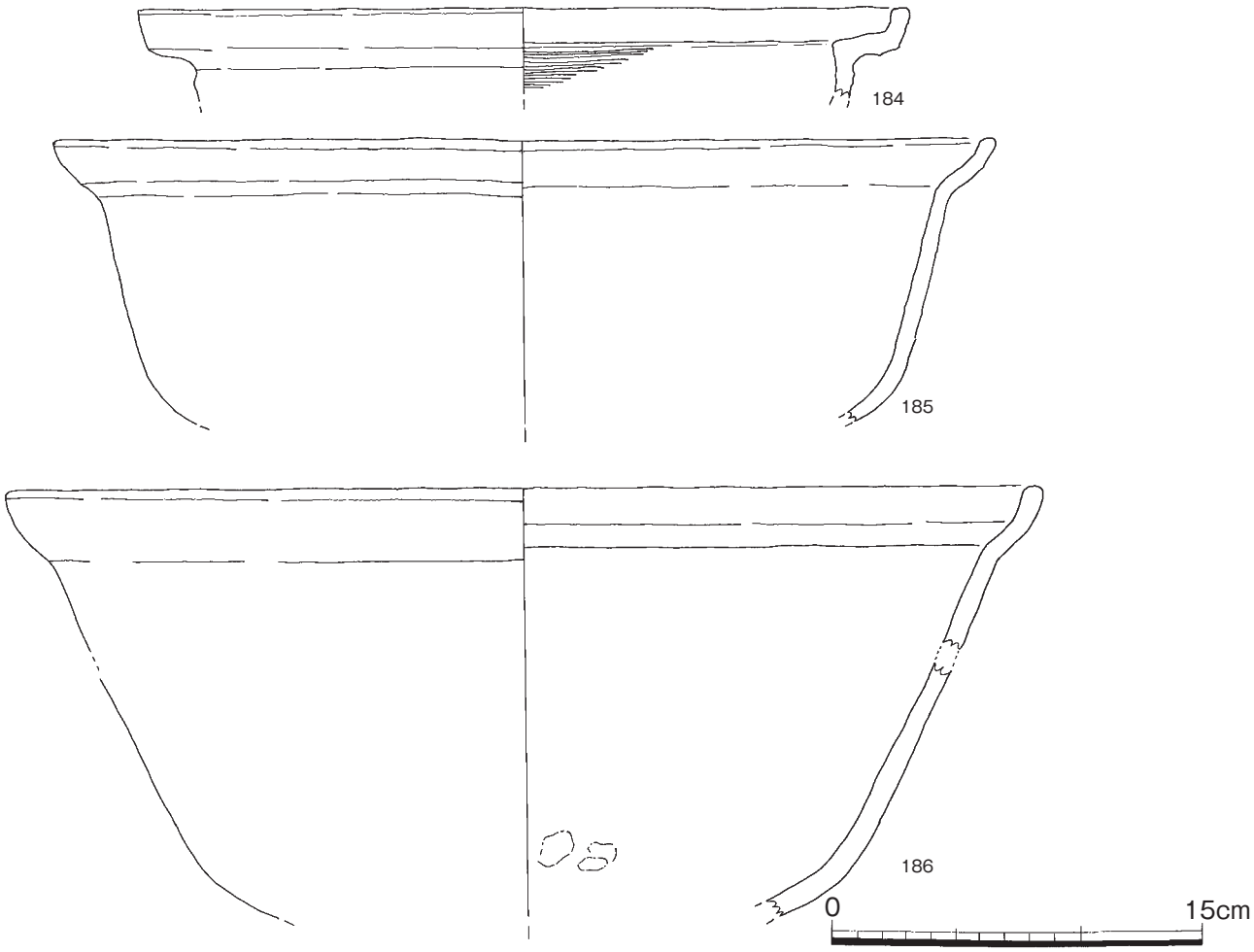


Fig.23　SD15 出土遺物実測図 18（土師質　鍋　1/3）

（194）に分けられる。196 は他の5段に比べ6段のケズリが施され、深くなった古相を示す。

時期は概ね 11 世紀から 13 世紀代と考えられる。

その他

199 は SD15 から出土した須恵質の甕である。外面に平行タタキ、内面平行タタキ、191 以外に出土した須恵質のものは東播系捏鉢以外では甕片が少量出土した程度である。なお、第 5 次調査の SD100 からは東播系の壺が出土している。200は SD15内の SX131から出土した畿内系瓦器椀である。銀化し器壁が薄いことから在地系と区別できる。内面の口唇部に沈線が巡ることから楠葉系の可能性がある。

201は SD15内の北側で出土した鞴の羽口である。周辺からは SD15に流入した鍛冶滓が多量に出土した。202は SD15内の SX128から出土した褐釉の水注Ⅴ-2b類である。203は SX128周辺の遺構検出面とした淡黄灰色粘土中から出土した縄文時代中期の阿高系土器である。基盤層の堆積時期を示す。

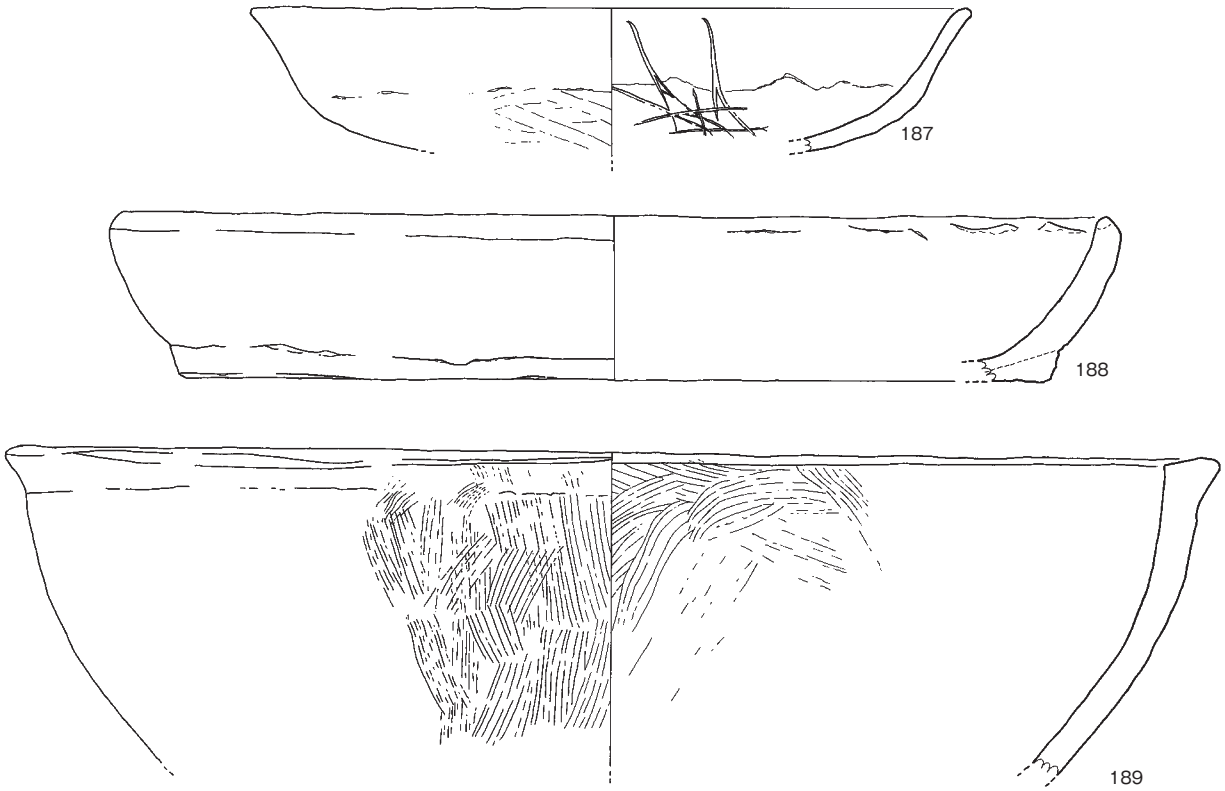


Fig.24　SD15 出土遺物実測図 19（土師質　鍋　1/3）

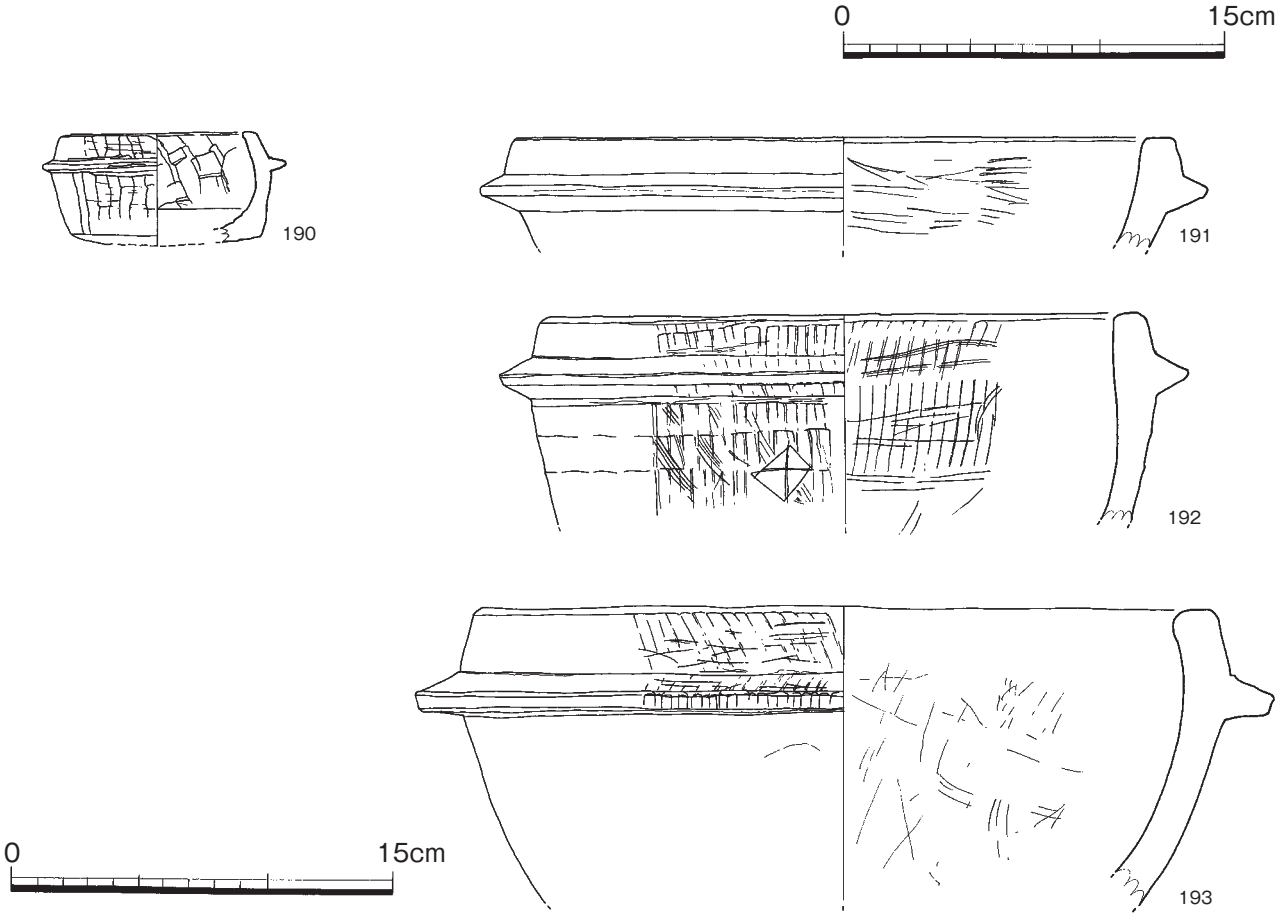


Fig.25　SD15 出土遺物実測図 20（石鍋　1/3）

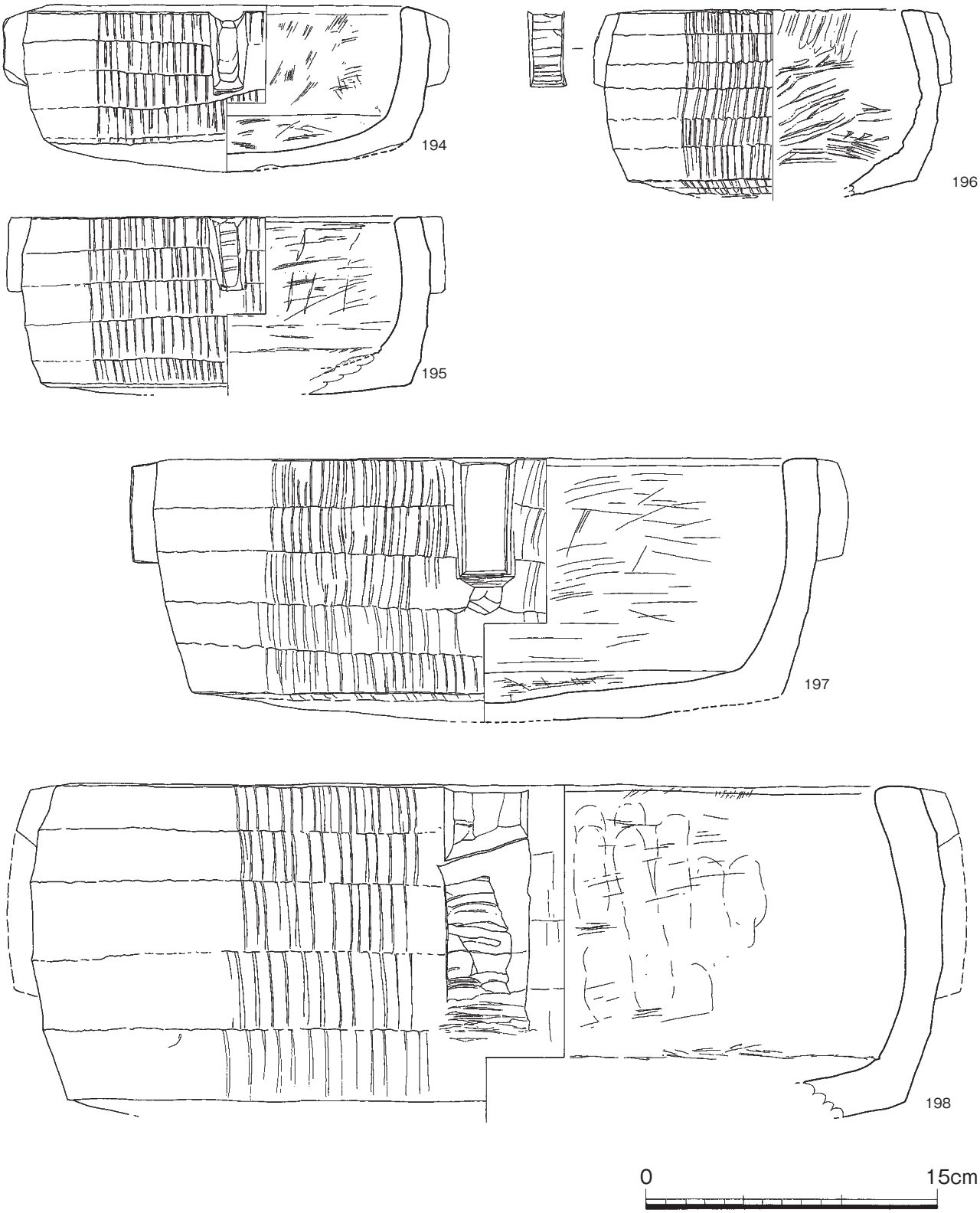


Fig.26　SD15 出土遺物実測図 21（石鍋　1/3）

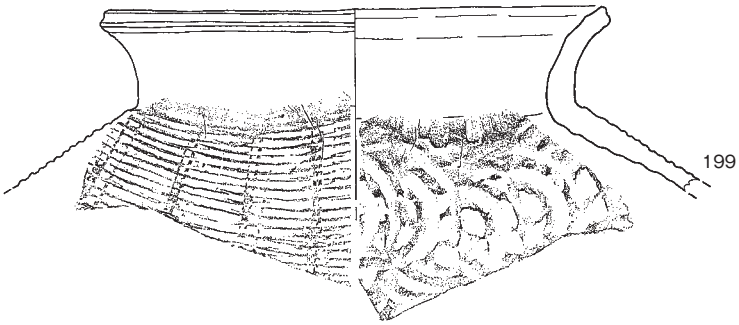


Fig.27　SD15 出土須恵器甕（1/3）

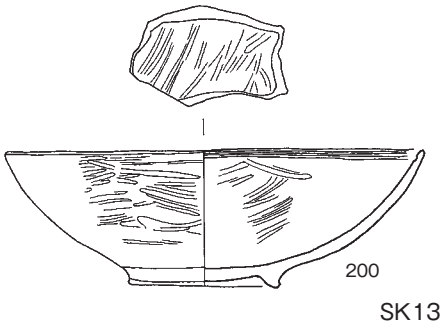


Fig.28　SD15（SX131）出土畿内系瓦器椀（1/3）

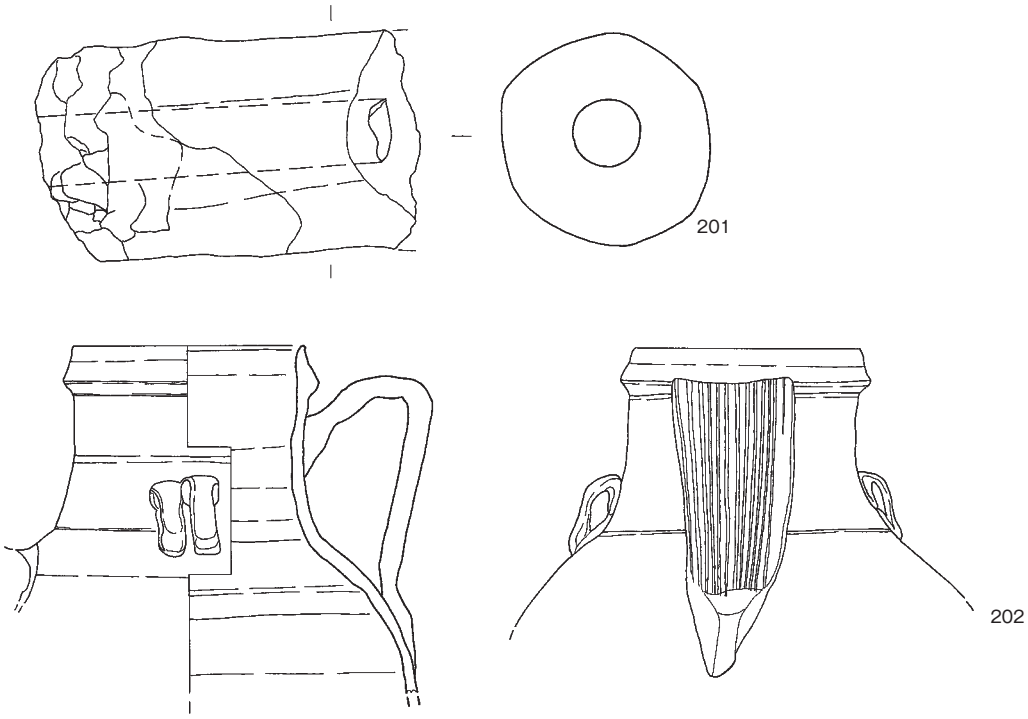


Fig.29　SD15 出土羽口、褐釉陶器水注（1/3）

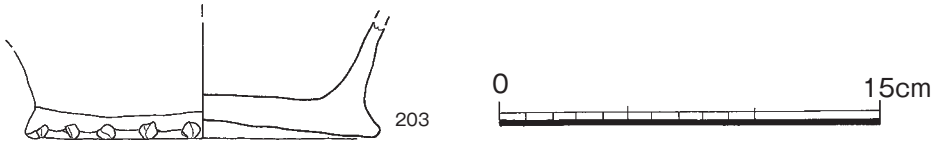
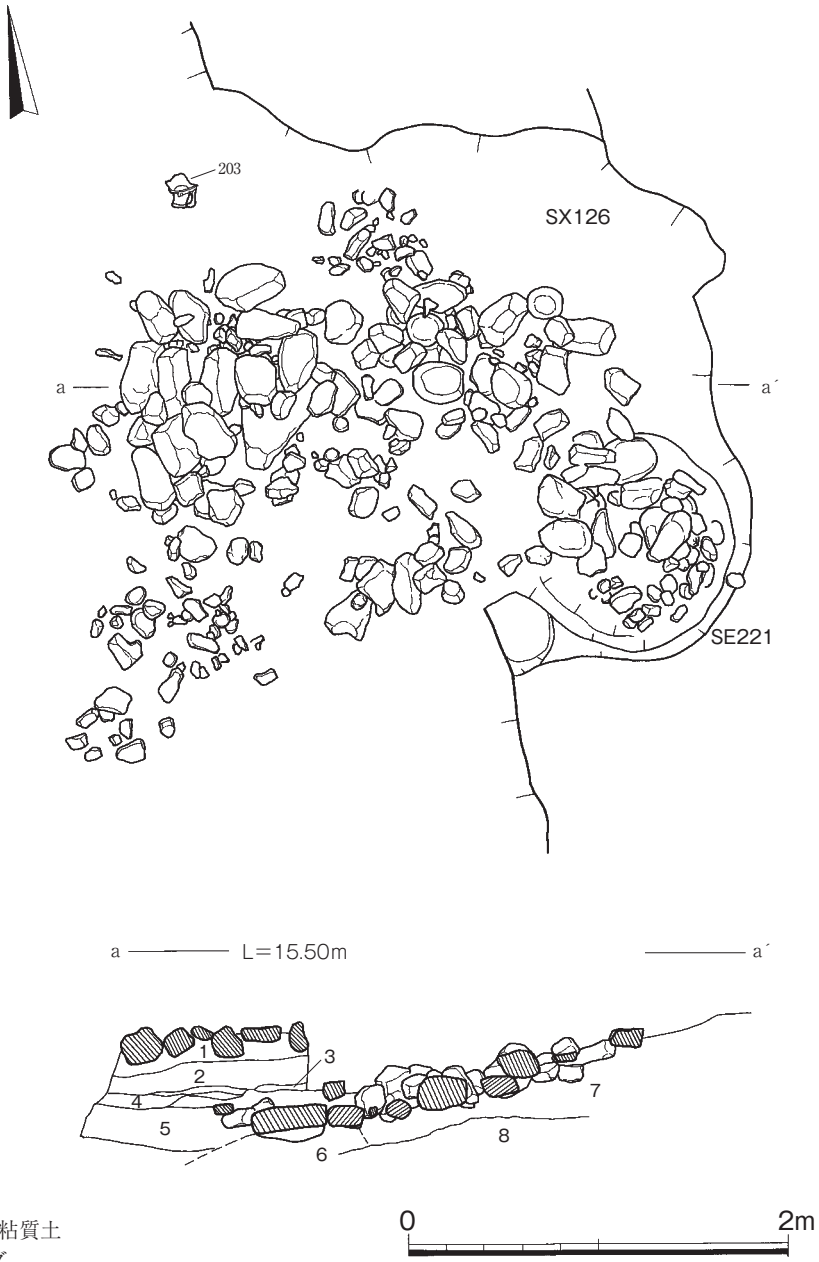


Fig.30　検出面土層中出土阿高系土器（1/3）

SX126（Fig.31　ph.7）

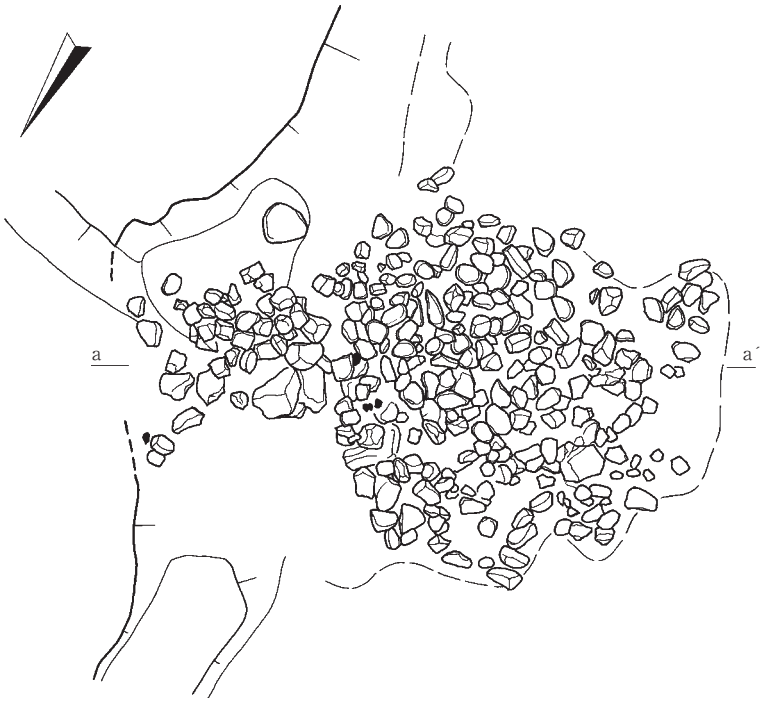
SD15の中央部東岸で検出された。東岸から流路内までの範囲に及んで粘質土に混じった集石が認められ、北側の SX220と同様の機能をもった「土だし」の可能性がある。即ち、岸から流路内に突堤を築き、流水を制御したものである。330×360cmの範囲内に大きさに差異がある石材が集積してい

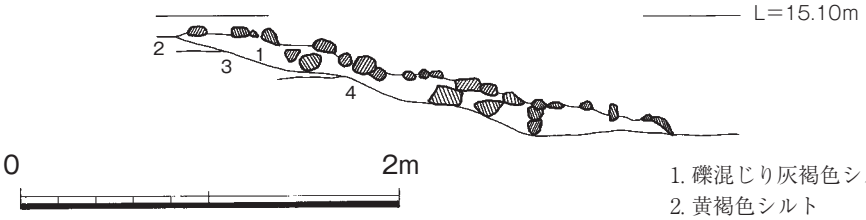


1. 灰褐色粘質土
2. 青灰シルト～粘質土
3. 褐鉄、スラッグ
4. 灰色細砂～粗砂
5. 黒色粘土
6. 青灰粘土
7. 明黄灰粘土～シルト
8. 砂礫

Fig.31　SX126 実測図（1/40）

たが散乱した状態がみられ、損壊したものと思われる。集石は粘質土と混じり合い、下底から遺構検出面までのレベルで出土した。下部の集石は SD15の下底に向かって傾斜していた。東岸際に構築された SE127の上部には石材が落ち込んだ状態で検出されたことから SE127より後に構築されたことが判る。集石近くから褐釉陶器の水注202が出土した。





1. 礫混じり灰褐色シルト
2. 黄褐色シルト
3. 黄褐色粗砂礫
4. 灰色粗砂

Fig.32　SX220 実測図（1/40）

SX220（Fig.32、ph8）

SX126 の北側で検出された集石遺構である。SX126 と同様に流水を制御した機能を有す「石だし」と考えられる。両遺構ともに湾曲した流路の東岸に築かれている。攻撃斜面側に近接しているが、 損壊したことによる改築か、併設していたものかは不明である。

200×300cm の範囲内に拳大のほぼ同じ大きさ礫を集めて構築している。岸から流路に向って傾斜した面となっているが、恐らく、上部の集石は流失したものと考えられる。周辺の下底にはスラッグや壁体が分布し、洪水等により東側の鍛冶遺構から流入したものである。

SX130、131（Fig.33、ph.9、10）

SD15 の西岸で検出された。両遺構ともに SD15 に流水していたことを示す痕跡が認められた。 SX130 は SD15 に向って裾広がる溝状のプランが検出された。埋土中にグライ化した粘質土に混じった拳大の礫が SD15 へ緩やかに傾斜して流入している状況がみられた。SX131 も SD15 に向かう溝状のプランが認められ、落ち際に流水によって浸食しながら集まったとみられる極めて小さい 5cm 以下の小石が検出された。

SD15 の上端に沿ってやや大きめの石材が並んでいる状況が認められたことから、検出時の状況を示す図面を作成した後に原位置から動いた、据わっていない比較的小さな石材を除去し、石列を検出していった。

Fig.33　SX130・131 実測図（1/40）

石列は階段状にレベルが異なる3列が検出された。最下段の石列は南側のSE221周辺で検出された石列に延長し、護岸の機能を有したものと考えられる。石列は地山直上ではなく特に中段の石列は約20cm浮いた状態で乱れが大きい。このことから洪水等により崩壊、埋没後に新設もしくは修築していると考えられる。構築は大きい石材を3列配置し、その間を小さめの石で充填したと考えられ、特に最下段の石列にその状況がよく見て取れる。

この部分のみに雁木状の石段がみられ、また上部に緩斜面の通路状の溝が検出されたことから舟着場の可能性が高いと考える。

溝

SD15の西側で検出された南北の条里方向に延びる溝は大半が集落廃絶後に畔溝等に利用された水田施設である。同様の溝はSD15を切ったものもある。

SD91

SD15の西側で検出された。西側に弯曲しながら延長する。上部は東側へ広く灰色シルトないし細砂が広がり、これをSD13とし、下部で幅90cmのSD91を検出した。

SD110

調査区北東部で検出された。条里方向より少し振れて SD133とは直交する。幅45cm、深さ12cmを測る。

SD133

SD110と直交する方向に延長する。幅45cm、深さ8cmを測る。

SD140

条里方向に沿って延長しSK114、SD15を切る。幅35cm、深さ21cmを測る。

4．掘立柱建物跡(Fig.34、35)

掘立柱建物跡は SD15の西側で12棟、東側で2棟を復元した。建物の主軸(棟) 方向はほぼ同じ条里方向である。

SB01　調査区北端で南側の側柱列３間(5.9m) のみを検出した。

SB02　調査区北西隅で検出された南側の側柱列3間(5.3m) である。柱間1.15m離れて平行する側柱列が検出されたが、構造は不明である。

SB03　梁行2間(3.9m)、桁行5間(6.0m) 以上の東西棟である。南側柱列の北側にやや不規則な柱列が検出されたが、間仕切りの可能性がある。

SB04・05　北面桁行に廂が付く2間 ×3間の東西棟である。ほぼ同位置に建て直しているが、西側と北側が少しずれることから内側の建物跡を SB04、外側を SB05とする。南側の側柱列には SB04、05のほか SB08の廂柱列が重複する。SB04の梁行3.5m、桁行6.75mを測る。SB05は梁行3.7m、桁行7.15mを測る。

SB06・07　3間 ×3間規模の大型方形建物跡1棟もしくは２間 ×3間の東西棟を1間分、南北に移動した2棟の建物跡と考えられる。東側の柱筋が３間通ることや1間分を移動する理由が考え難いことから前者の可能性が高い。北面5.58m、南面5.34m、東面5.50m、西面5.86mを測る。

SB08　北面に廂を備えた2間 ×4間の東西棟である。西側梁行4.10m、北側桁行6.70mを測る。

SB09　北面と東面に狭い廂を有した2間 ×3間の南北棟である。北面梁行3.90m、東面桁行約6.2mを測る。

SB10　2間 ×3間の南北棟である。北面梁行3.74m、東面桁行は短く5.44mを測る。

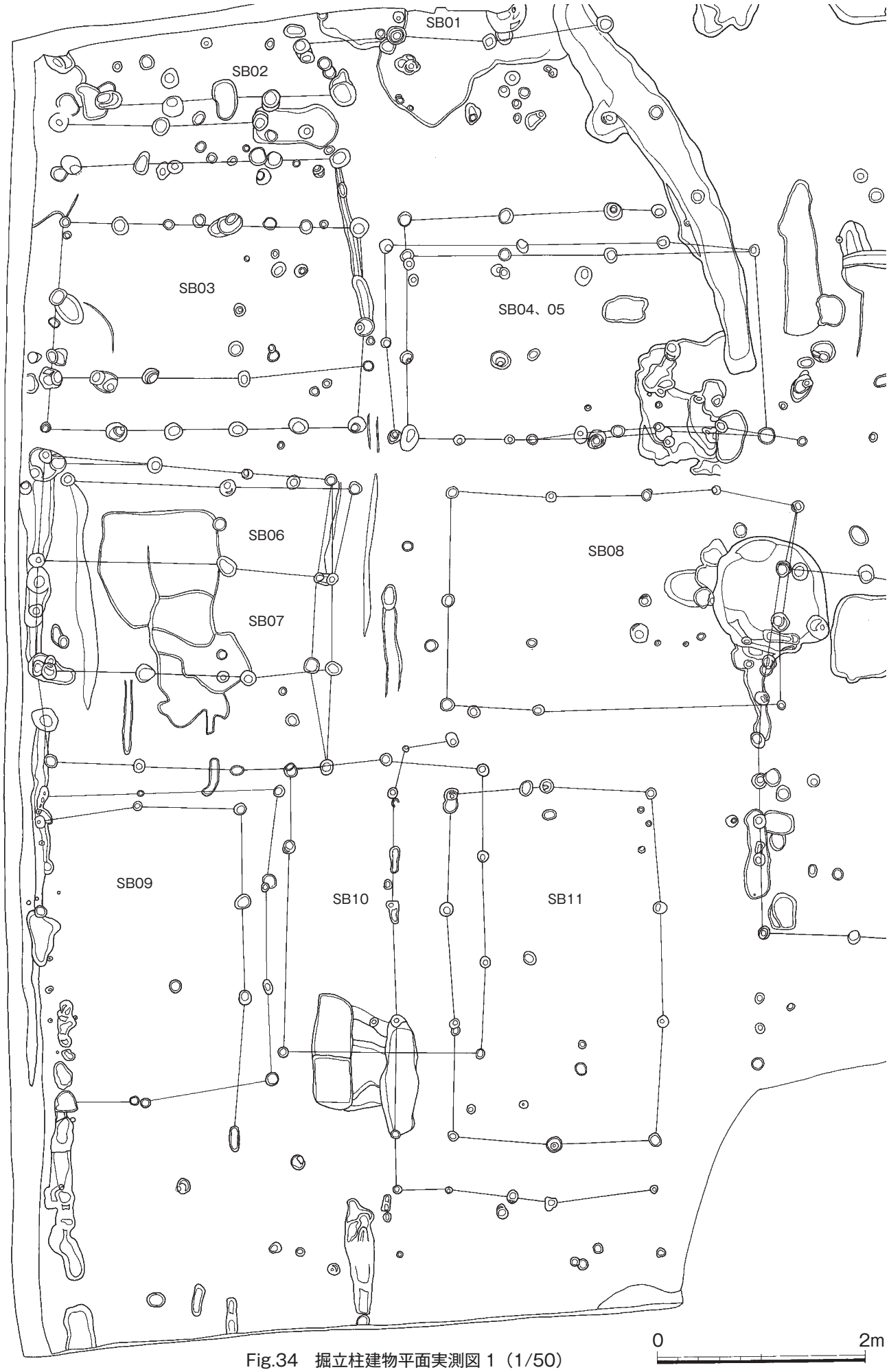


Fig.34　掘立柱建物平面実測図１（1/50）

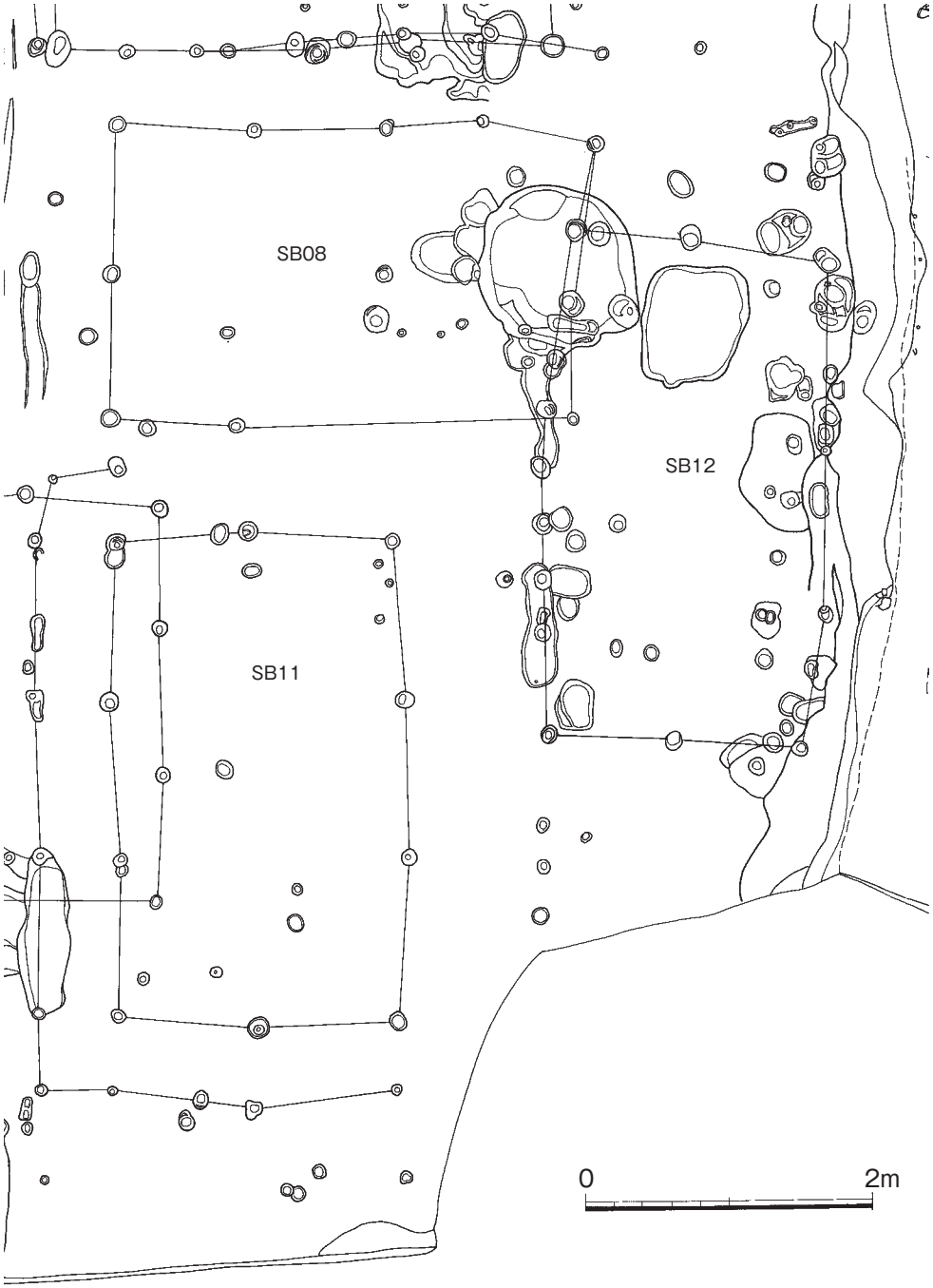


Fig.35　掘立柱建物平面実測図２（1/50）

SB11　西面と南面に廂を付した2間 ×3間の南北棟である。北面梁行3.84m、東面桁行6.64mを測る。
SB12　梁行2間、桁行は修築の柱穴が重複し明確ではないが、3間の南北棟と考えられる。北面梁行3.60m、東面桁行6.74mを測る。

5．土坑

SD15の西側で検出された SK198、199は集落存続後の水田施設と考えられ、集落に伴う土坑は東側に集中し大型のものはSD15右岸に沿っている。

SK105

調査区北東部で検出された。歪な楕円形を呈す。底面は緩やかな段をもって中央に深くなる。埋土は暗灰褐色粘土である。

SK111

調査区北東部で検出された。主軸方位は条里方向より東に振れるが、側の SD133と同方向である。直交する SD110によって方形に区画された中に位置している可能性がある。短辺は弯曲し、底面は中央に少し下がった舟底状である。埋土はシルトを含む暗灰褐色粘土である。

SX107

調査区北東部で検出された。SD133、SD110の方向より西側へ振れる。溝状に続く南北の延長が東側の上端のみ検出され、水田施設の可能性がある。深さは16cm程度で底面は北側に4cm低くなる。

SK106

調査区北東部で検出された。主軸長90cm、最大幅75cmを測る。

SK122

SK123とともに SD15の右岸沿いで検出された。長軸長163cm、短軸長143cmを測る歪な楕円形プランを呈す。埋土にはSK123と同じ暗灰色粘土が堆積し、底面は中心が深くなる丸底状である。

SK123

埋土は SK122と同じ暗灰色粘土が堆積する。長軸長227cm、短軸長167cmを測る。丸底状の底面もSK122と類似する。

SK222

調査区南東隅で検出された。SK123、222と SD15の東岸沿いの位置や形状が共通する。長軸長207cm、短軸長180cmの歪な楕円形プランを呈す。深さは16cmである。

SK198

SD15の西側で検出された。径約220cmの円形プランを呈す。深くなった中央部で深さ33cmを測る。南側に乱流の痕跡がある溝が接続している。集落廃絶後に整備された水田施設の可能性が高い。水口に一旦、用水を貯めこんで養分を補充した「置簀」と思われる。

SK199

SK198に隣接している。SK198同様の水田施設と思われる。長軸長160cm、短軸長150cm、深さ9cmを測る。

SK113・114

SD15の東側で検出された。当初、南北に大きく２つの遺構が切り合っているものとしたが、掘り下げによって北東部に楕円プランを呈した小型の遺構 SK114が切っていることが判明した。南西隅にはSX220の礫が被っている。

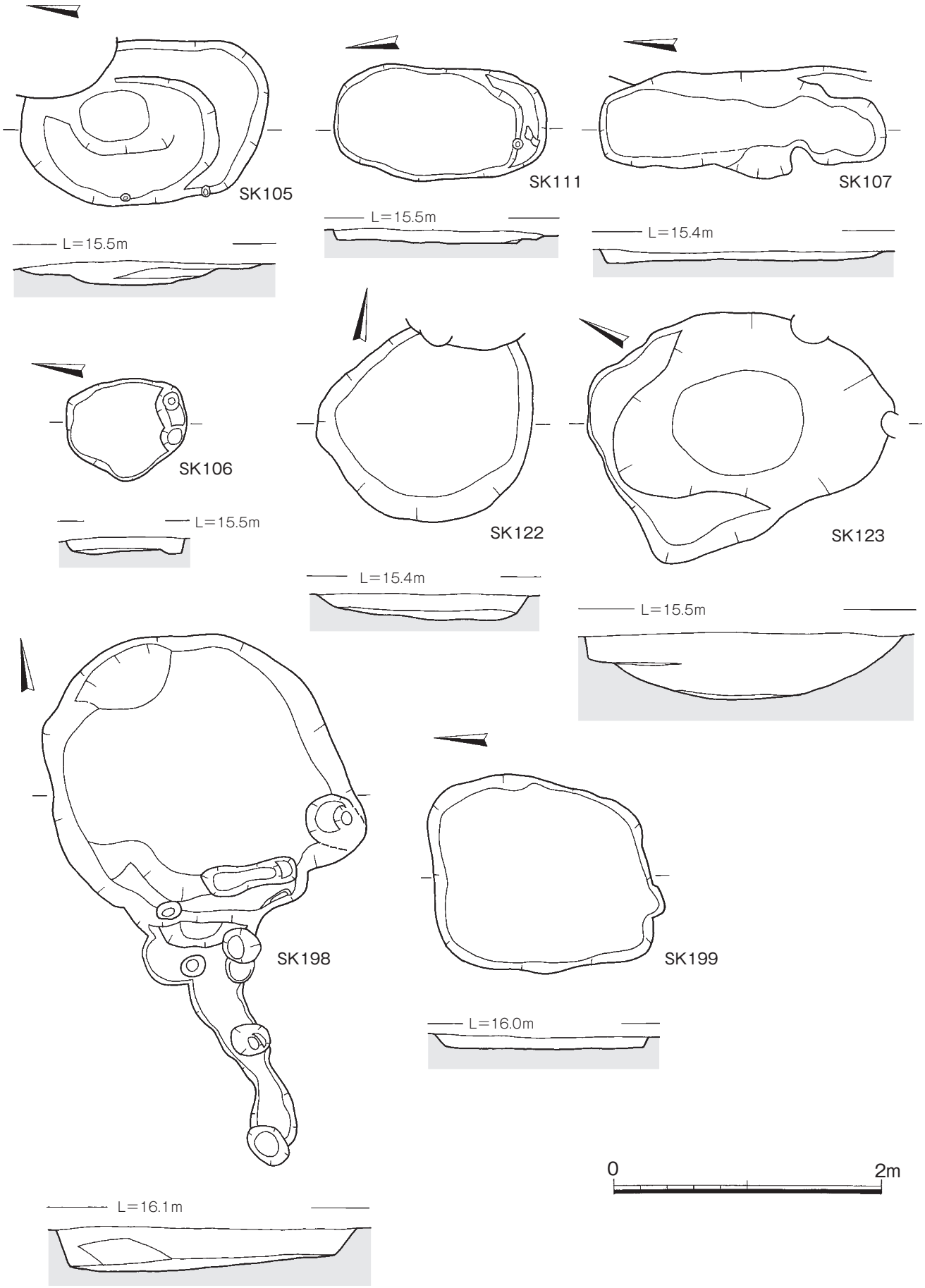
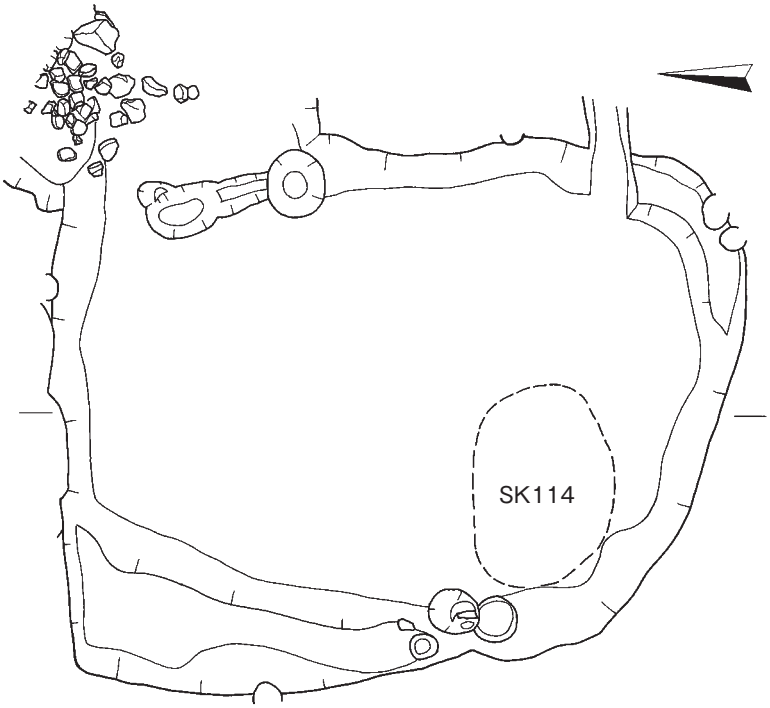
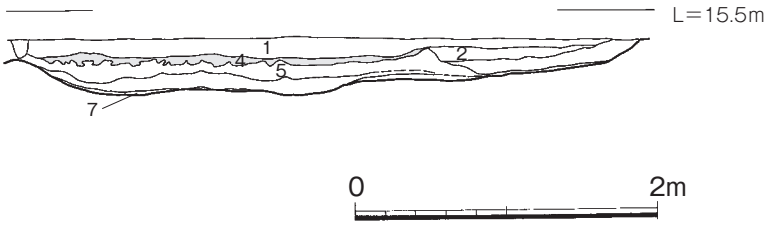


Fig.36　土坑実測図（1/40）





1. 褐色粘質土
2. 黒灰粘質土(SK114埋土)
3. 暗灰～黄灰粘土(SK114埋土)
4. 灰白砂(ほぼ全面に堆積)
5. 灰色粘質土
6. 暗灰粘質土
7. 青灰シルト

Fig.37　SK113・114 実測図（1/50）

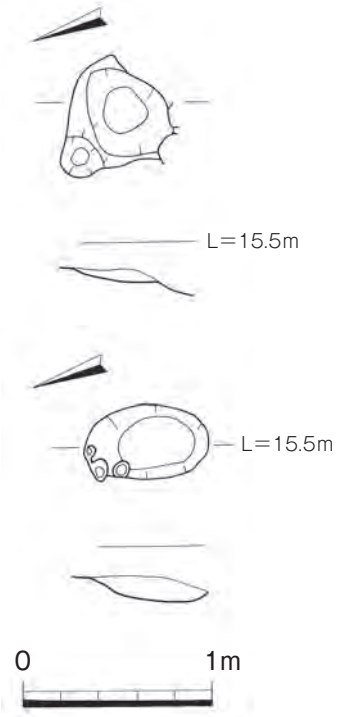


Fig.38　鍛冶炉実測図（1/40）

長軸長 360cm、短軸長 278cm の長方形に近いプランを呈す。深さは 30cm 程度である。
上層に灰褐色粘質土が堆積し、下層には灰白色の砂層、灰色シルト層が全面に堆積していることから水流が生じていたことがわかる。

6. 鍛冶炉（Fig.38）

調査区北東部で鍛冶炉の基底部である SX251 と SX252 が近接して検出された。南側の SX220 周辺の SD15 下底や SD15 の土層中には鉄滓が多量に流入していた。（Ph.21）

SX251（Ph. 22）

SK14 に切られている。40×50cm の範囲に焼土、炭混じりの土が検出された。

SX252

南側を SD110 に切られていた。SX251 と同様の掘方と埋土である。

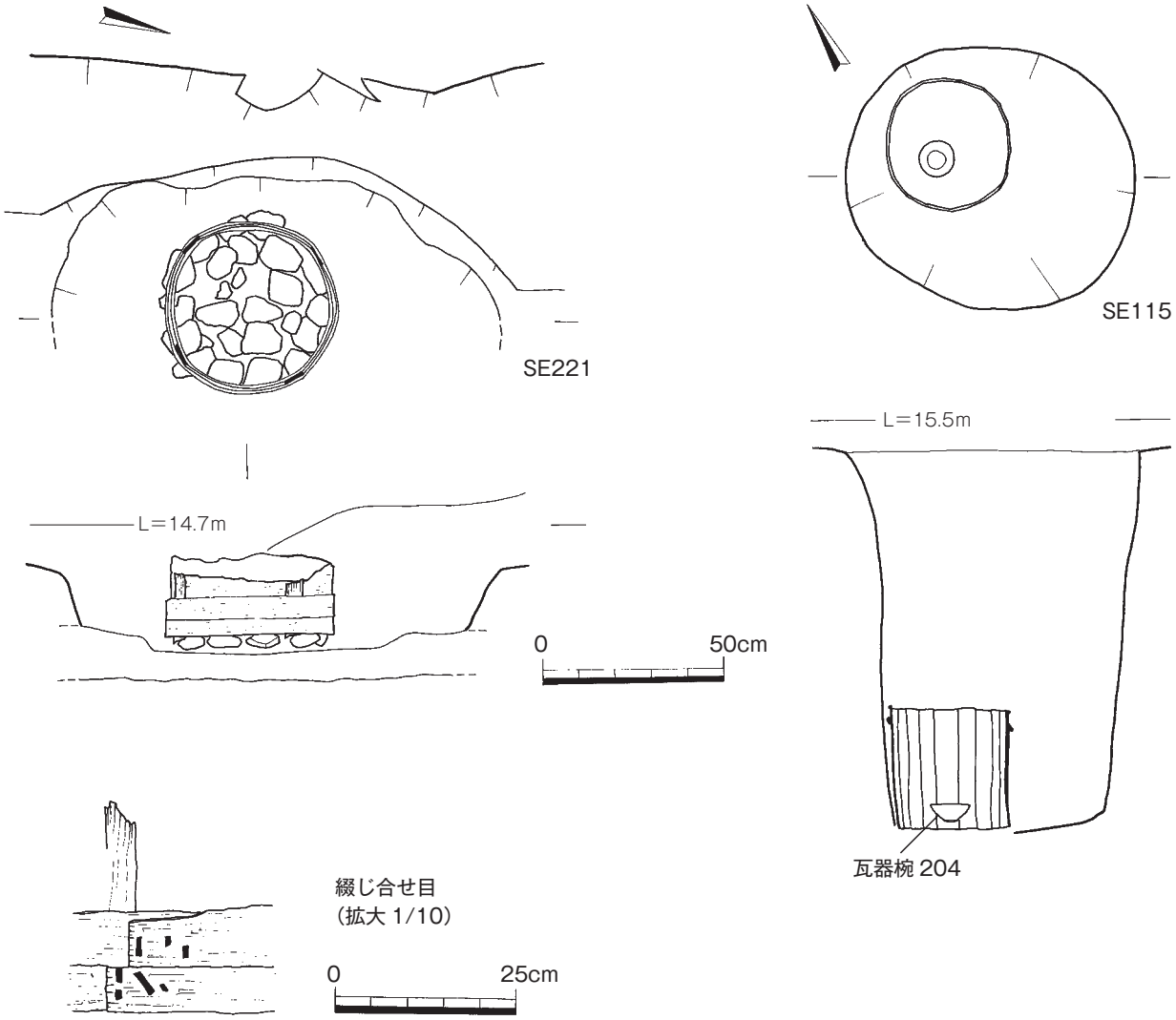


Fig.39　SE221、SE115 実測図（1/20）

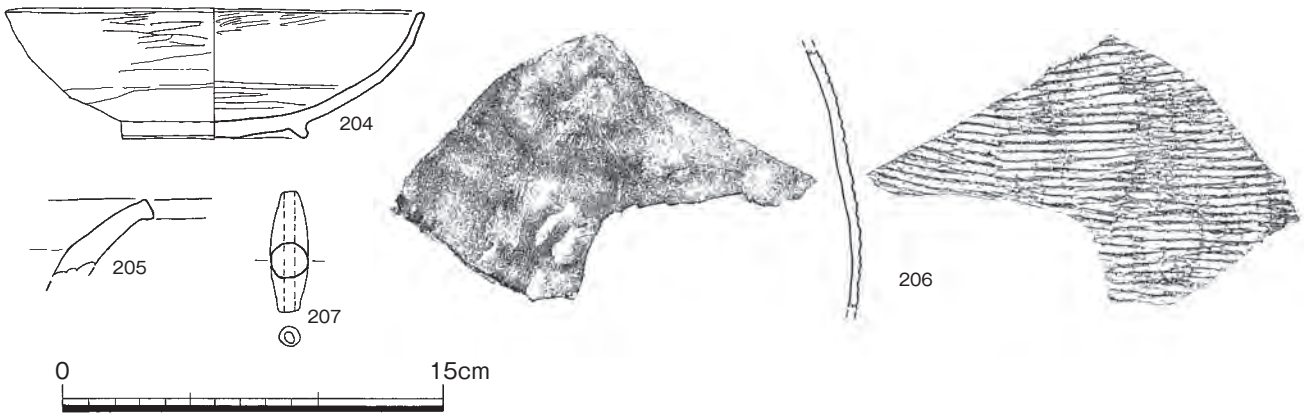


Fig.40　SE115 出土遺物実測図（1/3）

7．井戸

SE115

調査区北西端で検出された。掘方は径 107 ～ 120cm、深さ 160cm を測る。下底から桶側の井筒が 1 段、完形で出土した。桶の上部からは 20 ～ 60cm 大の石が 6 個程度と別の桶側片が検出されたことから、上部の桶や石組は取り出されたものと考えられる。最下段の桶は高さ 50cm の板材を 15 枚用いて径 50cm の桶組を作り 2 条の竹帯によるタガで締めていた。桶内の下底から 10cm 高い位置からは完形の瓦器椀 204 が正置の状態で出土した。桶の下底は砂礫に達している。

SE127

SD15 東岸に築かれた SX126 の東端で検出された。上部は SX126 の人頭大の礫が落ち込んだ状態で検出されたことから、SX126 の構築以前に機能していたものと考えられる。それを除去し、10cm 大の小石が集石し、一部、円形状に配列しているのが認められた。小石は井側の外側に充填し固定及びろ過の機能を有すものであった。掘方は径 90 ～ 100cm、深さは 65cm を測る。内部には方形縦板組の井側を構築し、その内側に溜枡とみられる曲物の井筒を据えている。井側の外側には上述の小石を充填している。井側は縦板材を組み合わせ 40×55ｃｍの長方形の枠を作る。板材は厚さ 0.8 ～ 1.0cm、幅 12cm、高さ 30 ～ 40cm を測る。各辺に 3 ～ 4 枚を用い、板材左右の両端を重ねて組み合わせている。枠の四隅に隅柱として径 4.2cm の棒杭を差し込み固定し、枠の形状を保持させている。枠の横桟木は検出されなかった。内部の井筒は曲物 1 段が遺存していた。曲物は外側の井側際まで広がり、径 35 ～ 50cm の楕円形である。高さは 20 ～ 30cm まで遺存していた。その下底には 30cm 大の平石が 1 個据えたような状態で検出された。

SE221

SD15 の西岸下端際で検出された。井筒の曲物上に護岸の石列が被っていたことから、SD15 築造以前に構築されている。掘方は東側が攪拌された SD15 下底の砂礫との区別が困難となっているが、概ね 120×180cm の楕円形プランであろう。内部に径 70cm の大型の曲物を据えている。曲物は 2 重となり間に縦板を 5 か所に入れ固定と締め上げを行っている。高さは 35cm まで遺存する。底面には 15cm 大の礫を敷き詰めている。

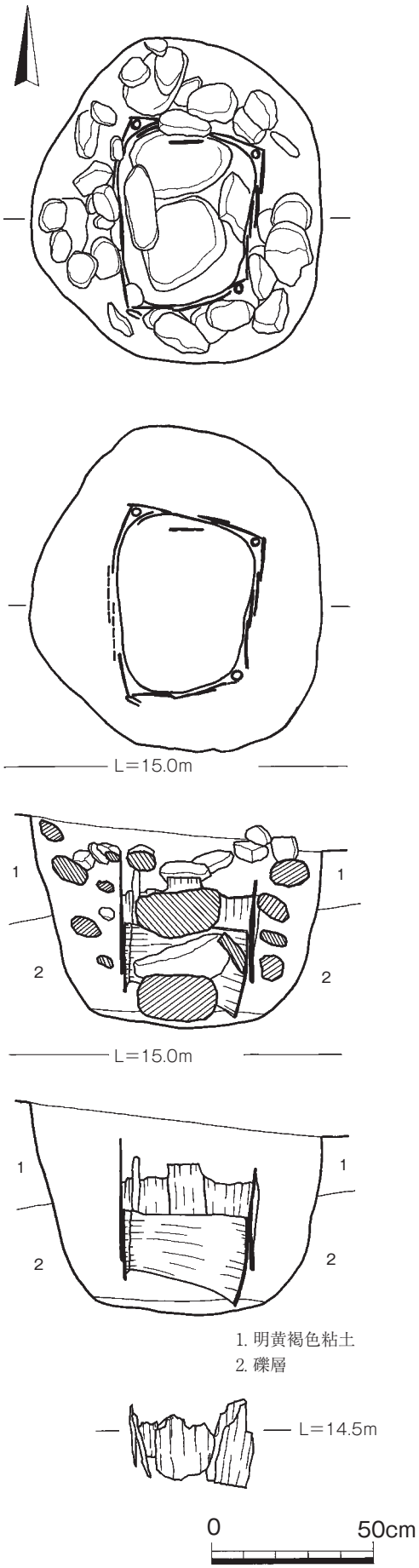


Fig.41　SE221 実測図（1/20）